

「リーディングクラブ」(東京)もmixiでメンバーを増やしている会だ。08年1月に始まり、20代後半から30代前半を中心に会員は2000人。場所は出勤前のカフェ。10人程度に分かれて、それぞれ推薦する本を持ち寄り紹介し、意見を述べ合うスタイルだ。

同席させてもらった日にまず紹介されたのは、『F.R.E.E』(クリス・アンダーソン著)。ウェブなどを利用した無料の商品やサービスの仕組みとビジネスへの影響について書かれたベストセラーだ。1980年代に刊行された『路上観察学入門』(赤瀬川原平)を持ってきた女性もいた。若い世代には新鮮なようで、参加者は「へえ〜」を連発、興味津々の様子だった。

社会との接着剤

彼女のようにmixiで読書会を知ったという人も多い。

「本の情報交換のような感じですね。ハードルを低くして誰でも参加できるものにした。『朝・本・仲間』がキーワードです」

呼びかけ人の一人、加藤健さん(26)はそう語る。最近では2日に1回、どこかで読書会が開かれている。mixiで知り合った人たち同士、地方でも開催されるようになってきたという。参加者に共通しているのは、会社の同僚には話さないことだ。あるメンバーは、



山崎真司さん 有紀子さん
二人とも婚活はしたことがない。「初対面の人に内面をさらすことないけど、読書会ではできる。結婚までが早かったのはそれでしょうね」

「自由に参加でき、みんなで面白い議論し、その中から新しいものが生まれてくる。『知の創発』をする場がうまくマネジメントされています」

田坂さんは、昨年末、山本さんの東京での読書会に著者として招かれ、講演をした。参加者が全員本を読んできているので、本に書いていない行間の深い話



20代、30代に広がる友達でも同僚でもない関係

読書会は新しい居場所

年配の人のものというイメージのあった読書会に、20代、30代の参加者が急増している。会社以外のつながりがほしい人たちの居場所になりつつある。

ジャーナリスト 高瀬 毅

読書会は人と人との出会いの場所でもある。東京の文学の会は西麻布のカフェで開かれた。場の演出がうまくいくと議論も活発になる

「勤め先では知らない、自分のけの世界をもっているのが嬉しいんですよ」

「さいたまブッククラブ」のNさん(43)は、会社という共同体が崩れたいま、若い世代が会社とは別の居場所を求めている、と感じている。Nさん自身、会社に勤めながら、09年3月から地域の人たちに呼びかけて読書会を始めた。十数人という少人

お金をかけないで勉強

数だが、自衛隊の是非を問うような議論に発展したこともある。「好きなこともまじめな話もできる。これからどうしたいのか、社会はどうあればいいのかを考えていくための、自分にとっての着地点、接着剤として読書会がある感じですね」

気が作られました。そのあとの金融危機で、お金をかけないで勉強する雰囲気が出てきたことも影響していると思います」

読書会の面白さや人気について山本さんの分析は、こうだ。「他人に何かを話すために読むと、インプットの質が格段に上がるんです。しゃべりながら自分も気づいていく。アウトプットしたいと思っている人はたくさんいるんですよ。でも友達や職場の同僚に対してはできない。読書会のようなリアルな場合は案外少ないんですよ」

作者と読者の交流の場

シンクタンク「ソフィアバンク」代表で多摩大学大学院教授の田坂広志さんは、最近の読書会の広がりについて、昔の勉強会とは違う、ネット時代の文化ではないかと見ている。

「自由に参加でき、みんなで面白い議論し、その中から新しいものが生まれてくる。『知の創発』をする場がうまくマネジメントされています」

午後6時。土曜日だというのに東京駅近くの貸し会議室に100人近い人たちが集まってきた。8割が男性だ。会社帰りの人もいる。各々ズシリと重そうな本を取り出した。

いま20代、30代の間で急速に広がりつつある読書会だ。

この日の課題本はフランスの経済学者で思想家、作家でもあ

るジャック・アタリの『21世紀の歴史』。351ページ。50年後、100年後の世界の中心都市はどこか。資本主義や民族、宗教はどうなっているのかということとを大胆に予測し、ヨーロッパでベストセラーとなった本だ。10人ずつ9グループに分かれ、ファシリテーター(司会役)が感想や意見を聞き、議論を深め

ていく。初参加の人もいるので、まずは自己紹介を兼ねながら意見を述べるところから始まった。「難しかったですね。結局2回読みました」

「理性的な面を強調する半面、人間の感情の部分が欠落している気がします。環境問題が社会の活動をどれくらい制限するか、記述が少ないと思いました」

「これからは韓国がアジア最大の勢力になるということですが、有り得ると思います」

「会社の1期下ぐらいからすごく閉塞感があって、(GDPが)いずれ日本は世界5位くらいになるという予測があったけど、そうだろうなと思います」

みっちり2時間。どのグループも話が尽きない。会のあとの飲み会にも70人あまりが参加深夜まで盛り上がった。

会の主宰者は名古屋で住宅リフォームの会社を経営する山本多津也さん(44)。山本さんが友人と4人で「名古屋アウトプット勉強会」(以下・名古屋)という読書会を始めたのはわずか3年半前。毎月200人ペースで増え、現在会員は3500人にまで増えた。

「こんなに参加者が多くなるとは思いませんでしたね。私自身、びっくりしているんですよ」

気持ちを話せる場所

参加者が独自にグループを作る。のれん分けもある。会員急増を背景に、2009年には東京にも発足させた。

昨年11月には、東京で文学限定の読書会も立ち上げている。1回目は西麻布のブックカフェに30人が集まった。こちらは女性が8割だ。課題は太宰治の『斜陽』。初回とあって開始早々は表情が硬い。だが同じ本を読んできているため、意思の疎通が早く、活発に意見を出し合うのにさほど時間はかからなかった。

「人間の奥深い所や精神的なことについて話ができました。こういうのは久しぶりです。課題がないと読もうという気がわかないので、楽しかったですよ」

住宅関連会社に勤めている30代のアヤコさんはそう話す。

正直に自分の気持ちを話せる



岩崎慎介さん
緑さん

初めて出会ったときの課題本はオースティンの『高慢と偏見』。「恋愛ものなので現代に通じるところがあり、議論も盛り上がりました」

山本さんの会では、作家の中村うさぎさんにも講演を依頼したことがある。このような著者を招くイベントに関心を寄せているのがブックディレクターとして活躍している幅允孝さんだ。「日本では作家が読者の前に出るのにはサイン会か講演会しかないんです。でも、もつと読者とフェアなコミュニケーションが取れる場所があってもいいのではないのでしょうか。読書会はその可能性をもっています」

名古屋市に住む山崎真司さん(37)と有紀子さん(36)が初めて出会ったのは、ローマの皇帝で哲学者のマルクス・アウレリウスが書いた『自省録』を読んだときだ。「ファシリテーターとして彼がまとめ役で、しっかりした好きな人だなと感じました」(有紀子さん)

本を通して相手を知る

だが、二人を結びつけるきっかけとなったのは、読書会のおりにグループのメンバーと一緒に行った地元のお祭りだった。「彼女だけ他人と違うところが反応したりして、笑いのツボが違っていたんです。変わっていて面白いなと思いました」それを機に二人は急速に接近

し、デートを重ねた。2カ月後の08年12月、真司さんがプロポーズ。09年2月には入籍した。出会いからわずか4カ月。スピード結婚に周囲が驚いた。「人を驚かせるのが好きだったので、『結婚したよ』と友人に言ったら、えーっ！って」(真司さん)

「私はあまり結婚向きじゃないとずっと思っていて、老後も友達と一緒にと言っていたくらいでした。だから余計、『意外だ!』と言われました」(有紀子さん)

真司さんは、理工系の国立大学でコンピュータサイエンスを学んだシステムエンジニア。有紀子さんは心理学を専攻し、大学院にも進学している。恋愛はあまり得意ではなかったという二人がこれほど早く結婚にこぎつけたのは、本を通してお互いの価値観を早い段階で知ることができたのが大きい。

「話が合うし、何を言ってもパツと返ってくる」

その有紀子さんは、今年2月4日に女の子を出産。ベストセラー作家だった有吉佐和子と同じ「佐和子」と名付けた。

国立大学の研究者小林悟さん(33、仮名)と妻の綾子さん(39、仮名)にとっても結婚は現実的でなかったが、「お互い気を使

小林悟さん(仮名) 綾子さん(仮名)

悟さんは理系だが、日本語を磨きたいと、小説を読む会に参加。「こういう本(『高慢と偏見』)を読む人なら」と綾子さんは結婚に傾いた



わなくていい」と口をそろえるほどウマが合い、やはり1年で結婚した。

力量ある読み手に学ぶ

岩崎慎介さん(31)と緑さん(31)は出会いから結婚まで1年2カ月。緑さんはこう話す。

「出会いが目的ではないのですが、本について語り合ううちに内面を知り、この人いいなとい

う感じになるのでは」

読書会は若い世代を中心に今後も広がる可能性がある。だが運営の仕方によっては表面的な情報交換、出会いの場として消費される「軽さ」も潜んでいる。速読術講師として読書をめぐる変遷を見てきた寺田さんは、「10年後の成長につながるような、学びのデザインを描かなければ続かないのではないかとクギを刺す。」

その学びと関連するものとして、田坂さんは批評する力の大切さを強調した。

「読書会は本の読み方を無言で伝え合う場なんだと思います。こきおろしたり、表面的な感想を言うのではなく、いいところを見つけて具体的に褒める技術。そういう力量のある読み手から学ぶ場ではないでしょうか」



「文芸書から学ぶことは大きい。本の魅力を知ってほしい」。名古屋の山本さんは強調する